

令和3（2021）年6月7日

## 学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 高 埴菲 学生番号 G7D5032017

〈論文題名〉 中国人日本語学習者の語レベルのリズム習得  
—カタカナ語の発音を通して—

〈審査委員〉

主査	拓殖大学外国語学部教授	齋藤 純男
副査	拓殖大学外国語学部教授	安富 雄平
副査	拓殖大学名誉教授	木村 政康

## I. 論文の主旨

本論文は、中国人日本語学習者の日本語におけるリズム面での誤りについて、実験を通してその原因を探り、その結果に基づいて有効な教育方法を提案しようとするものである。

## II. 論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

### 第1章 序論

- 1.1 研究目的
- 1.2 音声教育の現状と問題の所在
- 1.3 リズム教育の重要性
- 1.4 本研究の構成

### 第2章 先行研究

- 2.1 リズム
  - 2.1.1 言語のリズム
  - 2.1.2 日本語のリズム
  - 2.1.3 リズムユニット
  - 2.1.4 CSの発話を「リズムユニット」で分析した先行研究
- 2.2 VTS

### 第3章 調査Ⅰ：カタカナ語辞典の調査

- 3.1 カタカナ語の定義
- 3.2 カタカナ語を扱う理由と意義
- 3.3 調査概要
- 3.4 調査結果

### 第4章 調査Ⅱ：親密度が高い語を用いた発音調査

- 4.1 調査目的
- 4.2 調査概要
  - 4.2.1 調査協力者
  - 4.2.2 調査語
  - 4.2.3 調査方法
  - 4.2.4 分析方法
- 4.3 調査結果
  - 4.3.1 NS評価者の聴覚判断
  - 4.3.2 全体傾向

## 第5章 調査Ⅲ：親密度が低い語を用いた発音調査

### 5.1 調査目的

### 5.2 調査概要

#### 5.2.1 調査語

#### 5.2.2 調査協力者

#### 5.2.3 調査方法

#### 5.2.4 分析方法

### 5.3 音韻分析の結果

#### 5.3.1 NS評価者の聴覚判断

#### 5.3.2 全体傾向

#### 5.3.3 ユニット1に引き起こされた誤りの分析

### 5.4 音響分析の結果

## 第6章 促音の長音化

### 6.1 分析対象

### 6.2 促音の長音化現象が起きている頻度

### 6.3 緊張の概念

### 6.4 緊張の概念を用いた分析

### 6.5 VT法による指導法

## 第7章 調査Ⅳ：分節調査

### 7.1 先行研究

#### 7.1.1 4拍と5拍の境界

#### 7.1.2 分節のメカニズム

#### 7.1.3 まとめおよび問題の所在

### 7.2 調査

#### 7.2.1 調査目的

#### 7.2.2 調査語

#### 7.2.3 調査協力者

#### 7.2.4 調査方法

#### 7.2.5 分析方法

### 7.3 調査結果と考察

#### 7.3.1 NSの分節のメカニズム

#### 7.3.2 「フット崩壊」

#### 7.3.3 CS/NS間の分節の乖離に対する定量的分析

## 第8章 結論

- 8.1 全体のまとめ
- 8.2 日本語教育への示唆
- 8.3 今後の課題

## 参考文献

### Ⅲ. 本論文の概要

本研究は、中国人日本語学習者（以下 CS）の語レベルの発話における特殊拍の脱落と挿入によって引き起こされる長さの変動をリズムに関する現象と捉え、その原因を明らかにした上で、日本語のリズム教育に応用可能な実践的なリズム単位を考察したものである。

#### 第1章 序論

これまで日本語のリズム教育は「拍感覚の養成」を中心に行われてきたが、拍の等時性に基づく音声教育に効果があるとは言えず、リズムの習得は依然として大きな問題として残っている。また、拍という単位による分析では、なぜ特殊拍に「脱落」と「挿入」という正反対の現象が起こるのかを説明することは難しい。

このような問題の解決にあたって、「2拍1フット」という考えに基づいた「リズムユニット」を用いた分析では一定の成果が得られているが、長い語の発音についてはほとんど調査がなく、ユニットの変動についても言及はない。本研究の目的は以下の通りである。

- 1) CS にどのようなリズムの誤りが現れるのかを明らかにする。1 モーラ分の長さを持つユニット1だけでなく2 モーラ分の長さを持つユニット2についても検討する。
- 2) 長い語の分節において、日本語母語話者（以下 NS）と CS の区切り方の違いを調査し、両者の間の乖離は何によるのかを明らかにする。そして、それを日本語教育に生かす可能性を検討する。

#### 第2章 先行研究

先行研究と課題を概観し、本研究の理論的支柱となる VTS の原理について述べる。

#### 第3章 調査Ⅰ：カタカナ語辞典の調査

外来語、和製英語、そして外国語起源だが外来語ほど定着していない語を「カタカナ語」と呼び、その3万余語について調査した結果、語の構成、長さ、特殊拍の含有率という点から調査語として適切であることを確認した。

#### 第4章 調査Ⅱ：親密度が高い語を用いた発音調査

日本語のリズム習得において最も困難なものを予測するために、日本語レベルが超級の CS を対象に調査を行い、5～8 拍の「親密度が高いカタカナ語」を発音するときの問題点を明らかにし、リズムユニットという単位を用いてその原因を検討した。

その結果、ユニット2に関する誤りがユニット1に関するものより圧倒的に多く、ユニット2の変動もユニット1の存在によって引き起こされた現象と捉えられることがわかった。超絶レベルのCSはリズムユニットの伸縮を通してユニット1が安定できるリズムの実現を行っていることが示唆された。従来の説ではCSの誤りの7%しか説明できなかったのに対し、本論の説ではその65%が説明可能となった。

### 第5章 調査Ⅲ：親密度が低い語を用いた発音調査

より体系的に調べるため、全レベルのCSを対象に調査を行った。調査語は、既存知識の影響を排除するために親密度の低い語とし、すべてのリズム型を網羅した。

その結果、調査Ⅱで見られた傾向が確認された。そして、さらに、CVMに隣接するCVCVも不安定になりやすく、CVが隣接のCVMにつられて伸長し、その部分が切り離され、そこで改めてリズムの区切りが実現されるという事例も見出された。この分析では、CSの誤りの60%が説明できた。

調査Ⅲでは、NSの聴覚的判断だけではなく、CSとNSの各ユニットの比率を計算し、それを聴覚的判断による結果の裏付けとしている。

### 第6章 促音の長音化

促音の長音化という誤りの現象について、「緊張」という概念を用いて考察した。

促音の脱落と長音化は質の異なる誤りであるが、VT法の「緊張」の概念から見ると、どちらも「緊張不足」によって引き起こされた現象と解釈できる。CSの促音に関する誤りには「脱落」と「長音化」が圧倒的に多いことが確認され、促音生成の際に弛緩した発音になる傾向が強いことが明らかになった。持続時間を保った上で他の特殊拍との混同がないように促音を生成することは緊張度を適切に制御することである。本研究はVT法に基づく指導法を提案している。

### 第7章 調査Ⅳ：分節調査

CSとNSを対象に行った分節実験の結果を分析し、考察した。その上で、リズム教育における実践的なリズム単位について検討した。

長い語のリズム指導には、リズムユニットよりも大きなリズム単位を用いることが必要である。それには単語を2分割するのが合理的で、本論ではそれを「分節」、それによって区切られたそれぞれの部分を「リズムグループ」と呼ぶ。

NSに対して分節調査を行い、その結果を分析して、先行研究における説より多くの分節を説明できる原理を提唱した。

CSにも同じ分節調査を行い、NS全体の回答との間の距離を計算し、その分節能力を数値化して示した。また、CSに同じ語を読み上げさせ、リズム生成の点から評価を行った。そして、分節調査と発音調査の結果の相関性を調べた結果、NSの分節に近いCSはリズムの正解率が高いことが明らかになった。

## 第8章 結論

本研究の総合的考察を行った。得られた知見を踏まえ、日本語のリズム教育への示唆を行い、今後の課題を述べた。

本研究は、CSの語レベルのリズム習得について、以下のことを明らかにした。

まず、リズムユニットという単位を用いて、従来あまり言及されていない5拍以上の長い語を中心にCSの語レベルのリズムを分析した。その結果、CSはリズムユニットの伸縮を通して、ユニット1が安定できるリズムの実現をしていることが明らかになった。

次に、促音の長音化の誤りについても考察し、促音の長音化は緊張の不足に起因する誤りであると説明できた。

最後に、分節調査を通して、先行研究に比べて、より適用範囲の広い分節の原理を提出した。また、CSの分節能力と発音能力に相関性が見られることを明らかにした。

これらを明らかにした本研究は、CSに対する日本語リズム指導のための一つの指標になると思われ、大きな成果をあげたと言える。

## IV. 論文の総合評価

### 論文提出までの経緯

学位申請者は、2014年6月、天津科技大学日本語学科を卒業後、2015年4月本学大学院言語教育研究科博士前期課程日本語教育学専攻に入学、2017年3月に修了、同年4月博士後期課程言語教育学専攻に進学し、現在に至っている。修了に必要な単位は既に取得済みであり、外国語検定試験（日本語）にも合格している。論文提出時の業績は、『言語教育研究』（拓殖大学）に発表された論文計4本となる。博士論文完成発表会は、2020年12月に実施された。博士論文は2021年4月2日に提出され、2021年4月23日言語教育研究科委員会で論文申請が承認されている。

### 論文の審査結果

審査委員による論文審査は、2021年5月25日、拓殖大学大学院言語教育研究科論文審査基準に基づいて行われ、判定の結果、全員一致で合格であった。最終試験（口述試験）は、2021年6月6日に実施され、審議の結果、全員一致で「合格」と判定した。

## V. 審査所見

### 1. 研究テーマの適切性・妥当性について

本論は、日本語教育において重要な問題である日本語のリズムの習得についてその基礎となる研究を行ったもので、テーマとして適切かつ妥当である。

### 2. 先行研究、文献資料、調査などの情報収集の適切性・妥当性について

本研究を進めるにあたり、関連の文献に広く目を通し、関連の研究者からの助言を仰ぐなど、多くの情報を得て研究を進めたのは、適切かつ妥当である。

### 3. 研究方法の適切性・妥当性について

実験的な手法を取り入れ、厳密に分析を行い、慎重に考察したのは、適切かつ妥当であると判断する。

### 4. 論旨の妥当性

実験で得られたデータを客観的に分析し、そこから得られた新しい知見に基づいて教育方法についても考察を行ったのは、妥当であると判断する。

### 5. 以上の基準を満たしたうえで、全体の構成、言語表現が適正で、「論文」としての体裁が整っていること。

論文全体の構成は明確であり、言語表現も明晰で、論文として十分な体裁を整えている。

### 6. 論文の内容が独創性を有し、当該学問分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものであり、また、将来高等教育機関で自立した教育者・研究者としてこの分野で活躍していく能力および学識が認められること。

本論文では、これまでの研究では説明がつかなかった現象を説明することに成功している。申請者の、現象に対する探究心や研究に対する真摯な態度、教育に対する熱意は高く評価される。

また、申請者はこれまでに積極的に研究発表を行ってきただけでなく、複数の機関にて日本語を教授した経験も有している。

このように、学位申請者は、十分な能力および学識を備えており、高等教育機関で自立した教育者・研究者として活躍していくことができるものと認める。

## VI. 審査委員会結論

以上により、本審査委員会は、慎重・厳重な審査の結果、3 委員全員が一致して、学位申請者に対し、学位「博士（言語教育学）」を授与することに同意するものである。